

## 台湾「彩虹眷村」感懐



呉 東航

◆「彩虹眷村」(さいこうけんそん)は今、台湾の熱い観光スポットになっている。

ここが有名になったのは、約70年前大陸から来た退役軍人黄さんが描いた壁画である。退役軍人達が集まった村の数軒の家が鮮やかな色彩の絵で壁と地面が覆われた。素朴であどけなさに満ちたアートとして評価され、日本も含む多くのメディアにも注目されている。



黄さんは大陸の広東生まれで、我々の「両広兄弟」(辛亥革命や国民党の主役となった広東と広西の出身者を指す)なのだ。今年94歳にもなったが、大変元気よく、毎日、外に出て、観光客と話を交わしたり、一緒に記念写真に収まったりする。故郷の記憶や、戦争のことや、台湾にきた経緯などを明瞭に話している。

このような退役軍人たちが住む村の住居は多くは質素な建物なので、再開発で殆どが取り壊されたが、この一角だけは、観光価値があるとみられて保存された。アートのみならず、歴史の証としての意味も含むと思われる。

1949年、蒋介石が大陸で敗戦し、軍人、国民党員、知識人、名流、商人たち200万人(当時中国の上層階級の大半といえよう)を連れ、当時600万人しかいなかった台湾に連れてきた。これほど多くの敗軍残党が、他人の土地を占拠して生き延びてゆくには、略奪や殺戮もあっただろう。その前の2.28事件では現地住民2~3万人が殺されたそうだが、蒋介石が台湾にやってくると戒厳令が施行され、それは38年間にも及んだ。本省人と外省人が深く対立する起因となった。

これらのことは時間が経って、単なる歴史の1頁になりつつあるが、個人的に少なからずかわりがあるので、今年台湾を訪れた時、私は思わずこれらの文字を残した。

◆私の母方の祖父母は蒋介石と共に移ってきたその200万分の2であった。母方の叔母も若い時台湾で過ごし、後に香港に移住したが、彼女も200万分の1に数えられる。

祖父は国民党系の軍人だった。今、私の母方の叔父も90歳に近いので、祖父はあの黄さんの一つ上の世代にあたる。

台湾に来る前、大陸で多くの戦争を戦ったはずだ。

私は祖父に会ったことはない。幼い時には祖父がいるとも知らず、もちろん台湾にいることなどがなおさらであった。あの時代、大陸にいる我々は、こんなことがばれたら命の保証がなかった。今になって母親は事実を話すようになったが、当時は私の父親にも嘘をついていたのである。

私がまだ中学生のある日、母親が一人で隠れて泣いていたのを見た。祖父が亡くなったと言ったが、祖父がいることさえ知らなかった私にはただ茫然として、悲しい気分にもならなかった。実は、国民党敗戦後に大陸に残された母親も、20数年間祖父の顔を見ていなかった。もっと言うと、母親が一生に3回しか祖父に会っておらず、これは軍人の娘の宿命だったのだろう。

後に私がはじめて見た祖父の写真は、「彩虹眷村」のような質素な平屋の前で祖母と一緒に大型狩猟犬を引いて写っているものである。年をとっても軍人の凛々しい姿を失わなかった。

祖母はやさしく、気さくな広東婦人である。中台関係が緩んだ後、香港経由で大陸に2回戻ってきた。1回目は、たくさんのお土産をもって大陸にいる孫たちに会いにきたのであった。2回目はもう病が重くなったので、子供と孫たちに見守られ、2週間ほど後、広州で亡くなった。

祖母は台湾で、祖父とともにキリスト教に入信した。もともと読み書きのできない旧時代の女性だったが、敬虔なクリスチャンとなり、聖書を読み、聖歌も歌っていた。重病の際、神父にお祈りをしてもらい、死後のことをすべてキリスト教の慣習に従うと言い残した。それで、祖母は没後、広州にあるキリスト教霊園に埋葬されたが、祖父は一人台湾に残された。

最近になってやっと台湾に行けるようになったので、私の母親と叔父は相次ぎ訪れ、祖父の伝説や足跡を見つけようとした。しかし、やはり時が経ちすぎたので、祖父が住んでいた村さえもなくなってしまったようだ。

◆台湾、きみは島である。大陸に繋がらず、なおさら広東にかかわらない。しかし、我々の先代がここでの最後の生息を堪えてくれたことを感謝する。彼らの誤りを許しておくれ、きみの平穩を乱したのであった。これは「両広兄弟」のみの誤りではない。島が大陸の事情を理解するのは難しいが、あそこで常に愚かな争いが繰り返られる。近代史においては、きみは不幸であった。しかし、島であるおかげで、もっと大きな不幸が避けられたと考えても良いのではないか。今日、きみによい制度が確立され、さらなる安定と繁栄がもたらされるよう、先代の謝意と願いを引継ぎ、お祈りを捧げたい。島に幸あれ!